

農山村地域における伝統技術の継承に関する研究  
－栃木県那珂川町の漆掻き職人を対象として－Succession of traditional craftsmanship in rural mountain areas  
:focusing on a japanese lacquer producer in Tochigi Prefecture

荒井 紀子・山本 美穂

Noriko ARAI, Miho YAMAMOTO

宇都宮大学大学院農学研究科 〒 321-8505 宇都宮市峰町 350  
Postgraduate School of Agriculture, Utsunomiya University, 350 Mine-machi,  
Utsunomiya, 321-8505, Tochigi, Japan

## 要 旨

農山村地域における特用林産物生産は、食糧・収入源の確保、地域固有の文化形成だけでなく、その生産技術の継承を通して、資源の循環型利用と適切な空間の維持に貢献してきた。本研究では、特に漆に注目し、1) 日本の漆生産に関する歴史と現状を明らかにすること、2) 漆掻き職人をめぐる伝統技術と漆林の実態を明らかにすること、3) 伝統技術の継承と生産現場の今後の展開について考察することを目的とした。漆生産は天候条件に強く依存し、古くからの生産技術が継承されていること、漆林の土地所有者である地域住民の協力が不可欠であることが明らかとなったが、今後、資源量の減少と後継者不在のためその生産技術が継承されないことが危惧される。国産漆の供給による文化財保護という視点だけでなく、持続的循環型の生産様式を持つこと、耕作放棄地の有効活用と地域住民の参加を前提とすることなどに注目し、今後は自治体レベルでの取り組みが必要とされる。

キーワード：農山村地域、伝統技術、漆掻き職人、継承、ウルシノキ

## Summary

Supplying 'Non-timber forest products' in rural mountain areas has contributed to not only food and income source, formation of indigenous culture, but also sustainable exploitation of local resources and maintenance of suitable rural spaces through the succession of traditional manufacturing technique. Objects of this research are 1) to clarify the history and the present conditions about Japanese lacquer production, 2) to clarify the actual condition of lacquer tree woods lands and traditional craftsmanship succeeded by one of the Japanese lacquer producers, and 3) to discuss with the succession of traditional craftsmanship and the future deployment. So far it is clarified that Japanese lacquer production is strongly influenced on weather conditions, old craftsmanship has been succeeded by few people, and cooperation by the local residents who are landowners of Japanese lacquer tree wood land are indispensable. And it is apprehended that succession of craftsmanship is endangered because of lack of the resources and absence of the successors. From now on some governmental support is needed not only by the viewpoint of the preservation of cultural properties by supply of the domestic Japanese lacquer, but also its sustainable cyclical style of production, and effective land use of abandoned areas, participation of local residents'.

*Keywords:* rural mountain areas, traditional craftsmanship, Japanese lacquer producer, succession, Japanese lacquer trees

## 1 背景・目的・方法

農山村地域での特産林産物の生産は、古くより食糧や収入源の確保、また地域独自の文化形成に役立ってきた。これら生産技術は、先人から培われ、樹木の再生を促し、山林を野生動物との間のバッファゾーンとして機能・維持させる重要な役割を担っていると考えられる。そのため、これら生産技術の継承は重要であるが、特産林産物の一つである漆についてみると、現在安価な輸入漆の使用が一般的であり、国産漆は貴重で全国各地で僅かながら生産されている状況である。

栃木県那須郡那珂川町在住の秋田稔氏（以後、秋田氏）は栃木県で唯一の漆掻き職人であり、国内生産量のおよそ1割もの漆を生産している。この漆は国産漆を必要としている国の重要文化財の修復にも使われている。しかし2010（平成22）年現在、秋田氏に後継者はおらず、秋田氏の漆生産の実態を総合的に記した資料は存在しないことから、漆掻き技術の継承が危惧される。

そこで本研究の目的を以下の3点とした。1) 日本の漆生産に関する歴史と現状を明らかにすること、2) 漆掻き職人秋田氏をめぐる伝統技術と漆林の実態を明らかにすること、3) 伝統技術の継承と生産現場の今後の展開について考察することとした。

研究方法は、漆掻き・ウルシノキ・漆の概要と漆生産地の史的変遷に関する文献調査、漆掻き職人秋田氏への漆生産に関する聞き取り調査とした。

## 2 日本の漆生産に関する歴史と現状

### 2.1 漆掻きについて

漆掻きとは、特有の道具を用い、ウルシノキに傷をつけてそこから分泌する樹液（漆または漆液）を採取することをいう。漆を掻く者のことを「漆掻き職人」、「掻き子」、「漆掻人」、「掻取人」などと呼ぶ。漆はウルシノキの葉や枝、根など全体に含まれているが、漆掻き職人は主に幹の部分から漆を採取する。図-1のように、表皮と材部との間に漆の通る道（漆液溝）があり、漆はこの漆液溝を遮断するように傷をつけて採取する。

漆の掻き方は、養生掻き法と殺し掻き法がある。養生掻き法は、一本のウルシノキに対して数年に一度の割合で少しずつ傷をつけながら漆を掻き取り、なるべく木を生き長らえさせる方法である。この方法は、ウルシノキの種実と漆の両方を採取するのが目的で、種実から漆蟻をしぼることが盛んに行われていた時期はこの養生掻き法が奨励された。一方、殺し掻き法は、漆をより多く採取するために生まれた方法である。掻き終えると樹液の流れが止まり、その年に枯死してしまうことが、殺し掻き法と呼ばれる所以である。

殺し掻き法は、越前から出稼ぎに行った漆掻人によって全国各地に伝えられたといわれ、これらの出稼ぎ人は越前衆と呼ばれ、中には出稼ぎ先で定住した者もいた。藩政時代は各藩が財政確保対策としての殖産工業の奨励保護を行ったので、漆の採取は福井県（越前国の今立郡、丹生部）の漆掻人に直接的、間接的に依

存し幕府直営の需要、例えば日光における社寺造営の際には御用漆掻人として福井（越前）の漆掻人を雇用していた。越前の漆掻人は、各藩の要請や自身の生計を立てるために全国各地に出稼ぎした。この出稼ぎは明治より大正、そして昭和の初期まで続いた（伊藤、1979）。

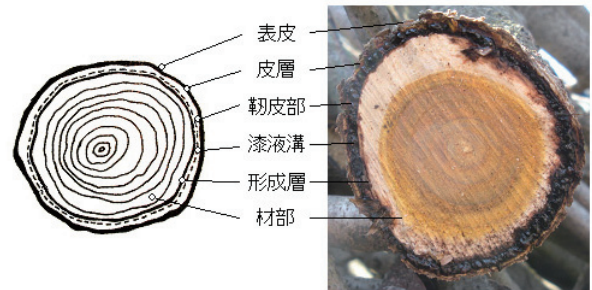


図-1 ウルシノキの断面

資料：室瀬和美（2002）『漆の文化—受け継がれる日本の美』角川書店、31頁参照  
注：右はウルシノキの枝、2009/12/27撮影

### 2.2 ウルシノキの概要

ウルシ科植物は79属600種ほどあり、その中には有用なものが多い。ハゼノキの実からは蠟分が取れ、マンゴーは果実を、カシューナッツは種子を食用としている。ウルシ科にはウルシ属 (*Rhus*) の群があり、日本列島に分布するウルシ属植物は、ウルシノキ (*Rhus verniciflua* Stokes)、ハゼノキ (*Rhus Suceedanea* L.)、ヌルデ (*Rhus javanica* L.)、ヤマウルシ (*Rhus trichocarpa* Miq.)、ヤマハゼノキ (*Rhus sylvestris* Sieb.)、ツタウルシ (*Rhus ambigua* L.) などがある。日本では、このうちウルシノキから漆または漆液とよばれる樹液を採取する。なお本稿では、木をウルシノキ、樹液を漆と表記し区別する。ウルシノキは、中国と朝鮮半島にも生育分布しており、中国産漆と日本産漆は同じ種の木から採取されたものである（伊藤、1979）。原産地は中国南方などとされ、日本にははじめ自生していなかったということが定説となっている。しかし2000（平成12）年8月、北海道函館市（旧南茅部町）の垣ノ島B遺跡から発見された漆の副葬品が、2001（平成13）年、炭素14年代測定法によって約9千年前（縄文早期）の漆製品と判明した（武内、2001）。一方、中国では浙江省の漆塗り弓が発見され、これが中国最古級（8千年前）の漆器であることが判明している（野上、2009）。これらにより漆の日本起源説も考えられているが、未だ明らかになっていない。

ウルシノキは、気候的観点からは全国至る所に分布できる樹木であるといわれている。一般的には日当たりがよく、しかも風通しの良いところで、土質は水の停滞することのない砂礫土壌で肥沃なところが適当である。ゆえにウルシノキが生理的、生態的に適地であるのは、土壌条件が良好であって、家屋の周囲、河岸、山麓、また路傍のようなところとされている。しかし適地であっても採漆作業期間中の降雨日数、降雨量の多い地方は、漆を採取できる日数が比較的減り、ウルシノキ栽培の経済的な適地とはいえない。

この他漆を分泌する主なウルシ科植物には、北ベトナム地方や台湾に分布生育するインドウルシ (*Rhus*

*succelanea L. var Kudo et Matsunra*)、カンボジア、タイ、ミャンマー、南ベトナムに分布生育するカンボジアウルシ (*Melanorrhoea laccifera*)、及びビルマウルシ (*M. Usitata*) などがある (伊藤、1979)。

### 2.3 ウルシノキの植栽・保護と漆生産地の歴史変遷

漆掻き技術の継承を考えるにあたって、これまでウルシノキや漆がどのように扱われてきたかを知る必要があると考え、その概略と当時の生産地について前掲伊藤 (1979)、四柳 (2009) を参考に以下にまとめた。

#### 2.3.1 中世以前

漆それ自体は塗料ないし接着剤であるが、木・樹皮・竹・皮革・土器などの素地 (胎) と結びつくことによって、付加価値を持った新たな製品が生まれる。これまでの発掘調査から、縄文期の漆塗り製品は、碗・皿・鉢などの木胎容器、壺・籠などの籃胎容器、土器、弓・太刀などの武器、櫛・腕輪・耳飾り・腰飾りなどの装身具、杓子、ひょうたんなど多岐にわたることが明らかとなっている。北海道、北陸、関東と東日本の縄文遺跡から盛んに出土したこれらは、弥生期になると本州ではわずかに点在するに過ぎないほどに激減し、代わって北部九州での発見が目立つようになった。この変化要因については、弥生漆器の出土例が縄文漆器に比べて少なく、未だ明らかではない。

飛鳥期は、中国文化等の伝来によって漆工芸が促進されたが、さらに向上させるために大宝律令によって漆工監督などの職制が確立され、またはじめてウルシノキの植栽を奨励する制度などが布告された時代であった。平安期の漆工芸は、奈良期よりも広範囲に拡がって、寺院などの仏像、仏具などの仏教漆工芸技術が発達した他、飲食器、灯火具の日常用具、武具、馬具などの装飾にも加飾としての蒔絵、螺鈿が用いられるようになった。鎌倉、室町期の武士階級、茶道人などは、漆塗り調度品を重宝、愛用し、これら漆塗品を制作する漆工芸家をいろいろな面からウルシノキを保護した。

生産地については、奈良期では陸奥、上野、また出雲国では島根、秋鹿、楯縫、神門の4郡が産地であることが出雲風土記に記されてある。平安期では、『延喜式』巻24 (延喜5年に完成) によってみると、上総、上野、越前、能登、越中、越後、丹波、丹後、但馬、因幡、備中、備後、筑前、筑後、豊後の15ヶ国であり、現在の府県数でいえば13府県が漆の産地として挙げられている。

#### 2.3.2 江戸期

江戸期は、京都の宮廷とこれを取りまく公卿連の愛用と、江戸における将軍、大名などの需要によって漆工芸が発展した。また国産会所を設けて製作した漆工芸品を集め販売斡旋し、材料を供与して保護を行った。物納された漆は、城下町の特権商人によって販売され、また各藩の領国経済が全国経済に組み入れられたりしたため、農民の商品作物としての漆生産は盛んになった。さらに新田、畑の開発を進めるために、年貢率を低くしてウルシノキを他の商品作物 (当時四木三草といい、桑・茶・楮・漆を四木に、紅花・藍・麻を三草としてとりあげた) と共に栽培を勧めた藩もあった。

特に藩の財政を確立するために栽培を勧め、漆と蠟漆実を専売品として取り扱った藩もある。その他、四木、停止木と称し伐採を禁止した藩、並木、堤塘にまでもウルシノキの植え付けを勧めた藩もあった。このようなウルシノキの植栽、保護の制度的な奨励は明治維新まで各藩によって続けられた。

寛永年間に漆を自国の物産として取り上げた国は、『毛吹草第四 (寛永15年 = 1638年刊)』によると、大和、上野、下野、周防、陸奥、出羽、越後、備中の8ヶ国、現在の県でいえば12県にわたり、平安期に漆の産地といわれていた九州の筑前、筑後、豊後の国は姿を消し、新たに陸奥、出羽というように、現在、漆の産地の多い東北地方の諸国に移った。江戸末期頃の産地と思われるところは、以下のように挙げられている (表-1)。

表-1 漆の産地 (江戸末期頃)

地方名	各産地
東北地方	陸奥南津軽、陸奥二戸、羽後山本、羽前南村山、岩代会津
関東地方	常陸那珂、下野那須、上野南甘楽、武蔵秩父、相模足柄
北陸、中部地方	越後岩船、甲斐南巨摩、信濃下伊奈、越中礪波、加賀石川、能登鳳至、越前今立、三河南設楽、美濃郡上飛騨古城
関西地方	紀伊郡賀、丹波、因幡管頭、備中川上、吉野
四国地方	阿波美馬、安芸高田、伊予宇摩
九州地方	日向北諸県、薩摩鹿児島

資料：伊藤清三 (1979) 『日本の漆』東京文庫出版部、45頁

#### 2.3.3 明治期

明治維新の新政府時代となると、諸制度の改廃が行われ、漆工は藩主から離れ、蒔絵などの漆工芸品は顧みられなくなったため、古くから維持されてきた漆工芸が衰退した。このため需要が減り、漆畑、漆林は、養蚕の桑園に移り、漆の生産地は激減した。ところが1873 (明治6) 年ウィーンで開かれたオーストリー博覧会に参加し、その刺激を受けて帰国した大蔵卿大隈重信は、1874 (明治7) 年に美術工芸品の輸出を目的とした起立工商会社を設立した。その後1882 (明治15) 年には宮内省御用漆器政策の傍らに、海外輸出を目的とする精工社が設立され、1887 (明治20) 年には東京美術学校を創立し、1891 (明治24) 年には漆器業界が漆工芸の研究、普及を目的として、日本漆工会を結成するといった漆の復興に関する環境が次々と整備されて、漆器、漆工芸界が大いに発展した。

しかし漆器の国内需要が増加し、これに要する漆は国産漆だけでは不足となったために、1878 (明治11) 年頃から安価な中国産漆が密輸入され、これを国産漆に混和して販売する者もあった。このため優秀品を制作する漆工は、純国産漆の購入する手段が少なくなったことと、安価で品質粗悪な中国産漆の輸入を憂い、これを防止しようと1883 (明治16) 年に中国産漆鑑定会を開いて鑑定を行った。また関係者は劣悪な中国産漆の輸入防止を図る一方、ウルシノキ植栽の拡大に努めた。1885 (明治18) 年から1891 (明治24) 年にかけては、国有林経営などでも当時、事業経費が少なく、短期に収入が得られる漆樹 (ウルシノキ) を三桠、楮、榲、栗などと共に盛んに植栽を行った。

ところが、需要の増大とともに安価な中国産漆の輸入が明治中期頃からは増大し、また一方では、養蚕などの進展とともにウルシノキの植栽熱が冷めていったため、国産漆は減産し始め輸入漆はますます増加した。政府は、輸入漆の品質粗悪なことを憂慮し漆関係者の



要望に応じて請願の都度、植栽に対する補助金を交付して増殖奨励も行ったが、漆の生産量は減少する一途をたどった。明治初期の漆産地の状況を表-2に示した。

表-2 漆の産地（明治30年前後）

国名	産漆量 (貫)	国名	産漆量 (貫)	国名	産漆量 (貫)
越中、越後、佐渡	8,000	丹波、丹後、但馬	1,500	備中、備後	540
羽前	6,000	近江、美濃、飛騨	1,400	日向、大隅	468
常陸	5,760	羽後	1,200	石見、出雲	375
下野	5,760	土佐	1,152	周防、長門	375
越前、若狭	4,400	上野	1,080	薩摩	360
陸奥	3,000	遠江、駿河	1,080	紀伊	312
陸中	3,000	阿波、おき、伊予	1,080	山城	312
三河	2,700	磐城	960	安房、上総、下総	240
信濃	2,160	伊豆、甲斐	900	摂津	180
大和	1,980	武蔵	880	伊予	180
能登、加賀	1,800	伊勢	846	豊後	120
岩代	1,800	陸前	648		
相模	1,800	因幡、伯耆	600	計（原典主）	65,006

資料：伊藤清三（1979）『日本の漆』東京文庫出版部、47頁より転載（原典は漢数字）  
 注1：産漆量の計は、原典で65,006貫と記載されているが、上記から計算すると64,948貫となる。また、「おき」は平仮名で記載されている。ここでは、全国の産地の参考資料としてそのまま記載した。  
 注2：1貫=3.75kg

### 2.3.4 大正～昭和期（戦前・戦中）

日露戦争後の景気的好転による諸工業の発展、また第一次世界大戦などによる日本の商品の輸出激増が原因で工業が躍進したため、漆の需要は直接的、間接的にも増大した。しかしこの漆の大部分は輸入漆によって供給され、国産漆は減産する一方であった。これに伴いウルシノキ栽培者数と漆掻き職人ともに減少した。したがって明治期の国内市場は、国産漆の入荷が多かったが、大正期になると輸入漆（特に中国漆）の入荷が多くなった。1916（大正5）年当時の中国産漆の価格は国産漆の約2分の1であった。この価格差は1935（昭和10）年頃まで続いた。1907（明治40）年より1913（大正2）年まで続けられた国のウルシノキの植栽奨励は、第一次世界大戦後も各府県での林野行政として継続奨励されたが、1919（大正8）年の農商務省令第16号「樹苗養成奨励規則」により漆苗も対象とされ、再び国家が奨励に踏み切り、漆苗養成にも補助金が交付されるようになった。その後1925（大正14）年には、国産漆奨励会が設立され、翌1926（大正15）年と1927（昭和2）年には漆苗木の無償配布を行った。このような取組みにより漆は減産を免れ、1万貫（37,500kg）台の生産量が確保された。しかし漆の需要は、漆器のみならず軍需工業、汽車、汽船、自動車、飛行機、建築、その他の美術工芸などに用いられることから激増し、1936（昭和11）年には約52万貫（約1,950,000kg）に達している。これに対して日本の当時の漆生産量は僅かに約1万2千貫（約45,000kg）弱で、供給の大部分は輸入漆に頼った。このように漆の需要が軍需の増加とともに一層強くなる一方、日中戦争による輸入減の傾向は一層顕著になっていった。

戦時下になると、漆の割り当ては政府により制限され、陸海軍の軍需資材の塗装用漆、鉄道車輛関係用漆に優先的に使用された。この時用いられた漆は主として輸入漆であった。しかし戦争が中国の奥地に拡がったために中国産漆の輸入は激減し、国産漆の増産が迫られた。農林省は、漆生産地の府県に府県単位の漆集荷組合を作ることを勧奨するとともに、漆の生産割り当てを行政措置として行った。集荷されたものは主務官庁の指示によって、軍需、官需、民需に配給された。太平洋戦争が進展するに伴い、輸入漆は全くというほど入荷がなくなり、一方集荷された国産漆の大部

分は、軍需、官需に割り当てられ、一般の民需の漆器産業には漆の公式的配給は全くなくなり、漆器産業は崩壊の状態となった。その後戦争が激烈になるにつれて、集荷された国産漆の全部が軍需に使われるようになった。

大正期の主要生産地は、青森、岩手、山形、栃木、茨城、新潟、石川などといった東北、関東地方が主となった。その後昭和になると前記の他に東北地方では秋田、宮城の2県が加わり、北陸では福井、中国地方で岡山、鳥取などの各県が主要産地となった。

### 2.3.5 戦後～平成期

終戦後の1946（昭和21）年は、ウルシノキの存立本数、生産量は激減していたが、これに反し、漆器生産地の復興に伴う漆の需要や各種金属（自動車、産業車輪、内熱機関、漁船等）に対する塗料としての漆の需要は戦前以上に増加した。これに対応して農林省は、苗木を無償配布するなどウルシノキの増殖奨励を図った。一方、民間においては、終戦後まで漆の生産集荷を行っていた主要産地県の生漆生産集荷組合などは解散して増殖事業に着手した。例えば、福島県の生漆生産集荷組合は、1948（昭和23）年に解散し、ウルシノキの栽培事業を行う会津うるし栽培組合を結成し、ウルシノキの増殖事業にとりかかっており、その事業が漆の増殖普及宣伝のために県と協力し講演・講習会の開催、地方展覧会への資料出品、また児童教育に熱心な若松市内正蓮寺住職に依頼して紙芝居を作成上演し、次代を担う青少年層の教育を行った。このように増殖運動が行われたのは会津地方だけでなく、漆器生産地の各府県で行われている。1956（昭和31）年度から開始された新農山漁村建設総合対策の一環として、特別助成措置が講ぜられて、ウルシノキの植栽に対する補助が行われた。この補助は1958（昭和33）年まで続けられたが、1952（昭和27）年の外国産漆の輸入自動承認制によって中国産漆の輸入が順調になるに伴い、各漆器産地県の植栽熱がなくなり、植栽する者は年々少なくなり、1958（昭和33）年には最盛期の1950、51（昭和25、26）年当時の約5%となり、5年前の1953（昭和28）年の約1割の植栽本数に激減した。その後も一部の県などからの要望によって1964（昭和39）年から林業構造改善事業で、また1965（昭和40）年から山村振興法などにより補助の途を開き、制度金融でも資金貸付の途を開いたが、植栽適用される者が殆どなく減少の一路を辿った。一方、1955（昭和30）年代は化学塗料が増加し、プラスチック製品が広まり出した時期でもあった。それによって、漆器の利用が低下するとともにウルシノキの植栽熱も低下した。

しかし近年、文化財の修復に国産漆が必要とされていることや、漆器産業による地域振興のため、ウルシノキを植栽する取り組みが全国各地で行われている。取り組む団体の例として、網走うるしの会（北海道）、真室川うるしの会（山形県）、日本漆総合研究会（山形県）、岩手県二戸市、福島県会津若松市、福島県喜多方市、日本文化財漆協会（東京都）、石川県輪島市・輪島漆器商工業協同組合、石川県加賀市、漆ぬるべ会



(奈良県) などがある。

漆の生産地は、1956(昭和31)年頃までは東北の各県と関東、北陸、関西の各府県および四国の徳島県など23府県におよび、量の多少は別として広範囲にわたって生産が行われた。しかし、1975(昭和50)年には岩手、茨城の両県で日本の全生産量の約90%を占め、その他の生産地は新潟、栃木、青森、岡山の各県を数え上げる状態となる。2003(平成15)年の生産地は北海道、青森、秋田、岩手、山形、福島、栃木、茨城、新潟、石川、長野、滋賀、京都、岡山の14道府県となっている。さらに特用林産基礎資料(注1)によると、2008(平成20)年に生産した府県は岩手、福島、茨城、栃木、新潟、京都、岡山の7府県まで減っている。

## 2.4 漆の需給量及び成分

国産漆や漆器が欧米からjapanとまでいわれたのは、十分に生産量があった国産漆で塗られた江戸期までの漆芸品、特に蒔絵の優秀さからである。それほど日本の漆器生産量は多量であり、1877(明治10)年当時は漆の生産量は850tあった。しかし2002(平成14)年には2tを下まわり、ここ数年は約1t前後を推移するまでに落ち込んでいる(表-3)。

日本における漆の自給率が1~2%と低いのは、その生産状態も零細で僅かずつ生産され、生産された漆が仲買(終戦までは元締といった)によって集荷され、それが販売されるのは一部の漆取扱業者だけで、一般の漆取扱業者や需要者は中国産漆のような輸入漆を多く購入しているためである(伊藤、1979)。これほど輸入漆の利用率が高いのは、漆の価格差からであると考えられる。表-4から、2008(平成20)年の国内生漆価格は輸入漆と比べて22.1倍であったことが分かる。

漆は一回の塗りで5~50μmのごく薄い塗りが可能で、接着性に優れ、電気絶縁性、耐熱性、耐溶性、耐

酸性に富み、他の塗料にはない質感と外観の美しさを備えている。さらに溶剤不要の天然の高分子であり、公害のない未来の塗料として魅力的な存在であるといわれている。

日本産漆と中国産漆の主成分はウルシオールで、ベトナム産漆はラッコール、ビルマ漆、カンボジア漆はチチオールである。それぞれ構造は異なるが、二価フェノール類であることは共通である。また同じ木から採取された漆でも、採取時期、採取方法の精粗と採取後の取扱方法などによって品質や構成成分の含有量も多少異なってくる(小林、2009)。日本産漆は、諸外国の漆と比べ品質が良いと周知されているが、これは主成分であるウルシオールの含有率が高く、その他の成分は少ないため相対的に乾燥が速く塗膜の強さが大であるためである。日本産漆と中国産漆の標準的な成分は、ウルシオール60~65%(フェノール性化合物、アルコール可溶分)、ゴム質5~7%(アルコール不溶で水可溶分)、含窒素物2~5%(アルコール不溶で水可溶分)、水20~30%、酵素(ラッカーゼ)0.2%であり、成分・組成は採取地域や季節・時間などによって若干の違いがある。漆は「油中水球型のエマルジョン」とよばれて、油(ウルシオール)の中に水の粒子(ゴム質水球)が界面活性剤の働きで分散し、乳化した状態になっている(四柳、2006)。中国産漆が日本産漆に比べ品質が劣るといわれているのは、採取方法の違いと山元から出荷までの取扱が違いためである(伊藤、1979)。しかし現在は、中国においても道路網が整備されるようになり、搬送方法も改善されたために、漆採取現場で掻き取られたままの良い状態で日本に漆が運ばれるようになりつつある。このため、同じ地域の漆が質の良い状態で輸入されるようになってきている(小林、2009)。

ウルシノキから分泌した漆の最初の色は灰白色であるが、空気に触れて水分が蒸発すると表面は褐色(内部は灰白色)となり、そのまま放置しておけば粘度が増大し、黒味を帯びた褐色となる(図-2)。さらに時間が経過するといわゆる乾燥状態(固化の状態ともいう)になり、漆の内部までも黒褐色となる(伊藤、1979)。

また掻いたばかりの漆を荒味漆または粗味漆(あらみうるし)と呼び、これには樹皮やごみなどが混ざっている。これを少し加熱して流動性を上げてから濾過をしたものを生漆(きうるし)と呼ぶ。



図-2 ウルシノキから分泌したばかりの漆

注：2010/06/05撮影

表-3 国産生漆需給量の推移

西暦	年	生産量(kg)	輸入量(kg)	輸出量(kg)	消費量(kg)	自給率(%)
1877	明治 10	850,000	—	—	—	—
1897	30	260,000	390,059	—	—	—
1912	大正元年	90,000	767,820	—	—	—
1928	昭和 3	50,000	1,535,220	—	—	—
1945	20	10,000	—	—	—	—
1965	40	6,254	352,738	—	358,992	1.74
1975	50	5,214	509,939	—	515,153	1.01
1985	60	5,640	323,480	—	329,120	1.71
1995	平成 7	3,427	167,915	—	171,342	2.00
2002	14	1,553	94,494	—	96,047	1.62
2003	15	1,388	84,672	—	86,060	1.61
2004	16	1,402	106,414	—	107,816	1.30
2005	17	1,340	73,030	—	74,370	1.80
2006	18	1,326	97,542	—	98,868	1.34
2007	19	1,378	81,423	—	82,801	1.66
2008	20	1,586	70,476	—	72,062	2.20

資料：伊藤清三(1979)『日本の漆』東京文庫出版、43、641、642頁(1877~1945年のデータ)、栃木県林務部林業振興課(2005)『特用林産関係統計資料』1-3頁(1956~2003年のデータ)、林野庁経営課特用林産対策室(2006)『平成18年特用林産基礎資料』2頁(2004~2006年のデータ)、林野庁Webサイト「特用林産基礎資料」  
URL (<http://www.rinya.maff.go.jp/j/kouhou/toukei/index.html>)、2010/01/07 (2007~2008年のデータ)

表-4 生漆輸入統計と国内生漆価格との比較

国名	2005(平成17)年	2006(平成18)年	2007(平成19)年	2008(平成20)年
	数量 金額	数量 金額	数量 金額	数量 金額
中国	71,950 106,843	94,554 161,644	79,235 164,415	69,000 154,867
ベトナム	- -	2,988 2,511	1,188 1,181	1,476 1,491
その他	1,080 863	- -	1,000 1,149	- -
計	73,030 107,706	97,542 164,155	81,423 166,745	70,476 156,358
輸入漆 a	(円/kg) 1,475	1,683	2,048	2,219
国産漆 b	(円/kg) 36,111	36,111	41,489	49,000
b/a	24.5	21.5	20.3	22.1

資料：林野庁Webサイト「統計情報、特用林産基礎資料」  
URL (<http://www.rinya.maff.go.jp/j/kouhou/toukei/index.html>)、2010/01/07 参照  
注1：単位：数量「kg」、金額「千円」  
注2：ここでは「生漆」価格の統計を示しており、漆掻き職人が採って販売する「荒味漆」の価格とは異なる。「荒味漆」は加熱や濾過する前段階の漆であり、「生漆」よりも低値である。

### 3 漆掻き職人秋田氏をめぐる伝統技術と漆林の実態

#### 3.1 秋田氏の紹介

秋田氏は1944（昭和19）年栃木県馬頭町（現在の那珂川町）に生まれ、中学卒業後家業であった漆掻きを継ぎ4代目となった。2010年現在栃木県唯一の漆掻き職人として、毎年700本以上のウルシノキから100kg以上の漆を取っており、これは国内生産量の約1割に相当する。『第6回（平成19年度）森の聞き書き甲子園』（注2）では、漆掻き職人として紹介されている。秋田家は代々漆掻きを生業としており、先代の出身地はそれぞれ、初代秋田重太郎氏は福井県今立郡（現在越前市）、婿入りした2代目秋田子之松氏は茨城県久慈郡水府村（現在常陸太田市町田町水府地区）、この息子3代目秋田忠重氏は栃木県那須郡馬頭町（現在那須郡那珂川町）である。

#### 3.2 栃木県那須郡那珂川町の概要

秋田氏在住の栃木県那須郡那珂川町は、2005（平成17）年10月1日に那須郡馬頭町と同郡小川町が合併して発足した。図-3に示すように、那珂川町は栃木県の東北東に位置しており、北部は大田原市、西部はさくら市、南部は那須烏山市、東部は茨城県大子町、常陸大宮市と隣接する。東西約23km、南北約19kmと東西に長く、総面積は192.84km<sup>2</sup>となっている。山地が大半を占め、丘陵地帯、那珂川沿いに広がる平坦地帯などで構成されている。中心部には関東の四万十川と言われる清流那珂川が南流し、その右岸には流れに沿って比較的平坦な沃野が開け、河岸段丘上に市街地が形成され丘陵地に集落が点在している。一方、左岸は武茂川が貫流し、山間地の小河川沿いに集落が点在しており、その下流に市街地が形成されている。気候は典型的な内陸性気候であり、寒暖の差はあるものの年間を通して生活しやすい環境にある。



図-3 栃木県那須郡那珂川町の位置

資料：株式会社 Mapion Web サイト「地図ガキ」  
URL（<http://www.mapion.co.jp/>）、2010/02/02 参照

### 3.3 秋田家の漆生産に関する歴史

#### 3.3.1 江戸期

秋田家の栃木県における漆生産のはじまりに間接的に関わると推測する記述を以下に述べる。下野国那須郡に存在した藩の1つ、黒羽藩の藩内各地にウルシノキの植栽が行われ、藩の財政確保に重要であったことが窺える。例えば1863（文久4年）にウルシノキの植栽の手伝いをするようにという令達があり、また八

塩村の沢内4町1畝6歩に漆2,800本植えたという記録（年代不詳）がある。また、「ウルシノキの伐採禁止（制限）を行った藩」の1つに越前（用木、伐採禁止木）がある一方、「漆、または漆実などを藩の専売（他藩への移出制限を含む）にした藩」に越前や下野、常陸はこれらに含まれていない（伊藤、1979）。このことから、ウルシノキの伐採が禁止された越前藩にいた者が漆実を持ち出し、伐採禁止のされていなかった他の地へ移り、殺し掻き法による漆生産を確立していったのではないかと考えられる。この他の地の1つに下野が含まれていたと考えられる。これらから、江戸期では栃木県内で漆の生産が盛んであったことが推測できる。

#### 3.3.2 明治～大正期

明治期は、一度漆の生産が衰退したが漆工芸の再興の過熱とともに国産漆の需要が高まった頃であった。一方安価な中国産漆の輸入量増と農家のウルシノキから桑や茶、養蚕などへの転換のため漆生産が減少傾向にある時代でもあった。

この時代背景の下で、秋田家の栃木県における漆生産は、初代が福井県から栃木県に移り住んだことから始まった。初代は1877（明治10）年頃（推定）、掻き子連れて福井の今立から栃木県の旧馬頭町に約5反歩（1,500坪）の土地を買った。そこで初代は連れてきた掻き子や栃木県や茨城県に在住する掻き子を集め、彼らが採取した漆をまとめ、北陸の漆器製作者へ販売するという元締めを行っていた。旧馬頭町を選んだ理由は、当時栃木県東域から茨城県北西域はウルシノキや掻き子が多かったこと、また適当な空き家を見つけたことだろうと秋田氏は語る。江戸期の各藩のウルシノキの保護政策が影響して、初代が移り住んだ時にはすでに多くのウルシノキがあったと考えられる。

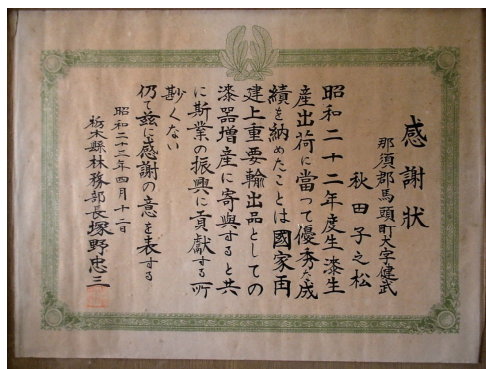
#### 3.3.3 昭和期

昭和初期は、漆の需要が軍需の増加とともに一層強くなる一方、これに反して日中戦争による輸入漆の減少傾向は一層顕著となり、国産漆の増産は国家的な課題であった。

このような時代背景の下、栃木県には北部と南部の漆組合があり、秋田家2代目は北部の漆組合の組合長を務めた。なお栃木県南部の漆組合は茂木にあった。終戦後、漆組合は解散して当時の資料も処分された。1948（昭和23）年に漆生産出荷の業績が認められ、2代目へ当時の栃木県林務部長から感謝状が送られている（図-4）。秋田家は国産漆の供給によって、終戦後の国家再建上大きな貢献をしていたことが窺える。また、この頃茨城県大子町と栃木県茂木町に問屋ができ、近くで漆を販売することができた。

高度経済成長期は、漆生産者にとって景気の良い時期であった。しかし農業の機械化に伴い、それまで田畑のそばに生育していたウルシノキが耕作の障害になり、伐採されてしまうことが多くなった。以前掻いた後の伐採木を、稲を干す杭として使っていたが稲の乾燥も機械化されるようになると全くその用途がなくなった。





図－4 2代目秋田子之松氏への感謝状

注：2009/09/15 撮影

### 3.3.4 平成期以降

秋田家では稲作とコンニャク、葉タバコの栽培を行っていたが、平成に入ってからこれらをやめて、ウルシノキを植えていった。また周囲の若者は地域外へ出稼ぎに行くようになり、多くの農家は農業を続けることが困難になっていった。このため農家に頼まれて休耕田にウルシノキの苗を植え、あるいは秋田家から農家へお願いして苗を植えていき、漆林を育てていった。一方、景気が悪くなるとともに近くの漆問屋がなくなり、周りにいた漆掻き職人も少なくなっていったため、他に漆の販売先を探す必要に迫られた。秋田氏は運転手を雇い、採取した漆を持って北陸や和歌山、東京の方面で売り歩いた。このような地道な努力で顧客を見つけ、販路を切り開いていったのである。

### 3.4 秋田氏にみる「漆生産」の過程

秋田氏は殺し掻き法で漆を掻いており、1年間をひとつの仕事の区切りとしてみることができる。秋田氏への聞き取り調査結果より、1年間を5月の下刈りから翌年4月までとして、仕事の流れを表－5に示した。各仕事の時期は毎年多少前後する。ここでは、漆生産は1年間を通した漆の生産のための全体の仕事とし、漆掻きは漆生産の一部の仕事としている。

表－5 漆生産の1年間の流れ

月	仕事(時期)	内容
5	下刈り(連休明け)	原木の周りの雑草や竹、つる植物等を刈り払う。
	ルート決定	その年に掻き取る原木本数を決め、それを場所や地形などに考慮しながら4等分して4日間ですべて回れるようにする。(四日山)。
	(中旬～下旬)	2回目以降の辺掻きの基準となる傷を幹に一定間隔でつけていく。
6	目立て	
	(中旬～下旬)	
6	辺掻き	4日毎に、4日前につけた傷の上に少し長めの傷をつける。傷からしみ出た漆を掻き掻きですくい取りタカツツポに入れる。
7	下刈り(下旬)	雨天時に雑草等を刈り払う。
7	下刈り(中旬)	雨天時を除いてほぼ毎日掻き取る。
8	辺掻き	＃
9	辺掻き	＃
10	洗紙作り(下旬)	漆の出荷に必要な洗紙を作る。
	裏目掻き	辺掻き終了後、目立ての下と辺掻きの上に幹を半周する傷をつけ、幹の上方と太めの枝に傷をつけて採取する。
	(～中旬)	裏目掻きと裏目掻きの間に樹を一周する傷をつけて採取する。
	止掻き(中旬～)	止掻き終了後、原木を伐採する。
	伐採搬出	
	(中旬～下旬)	
11	出荷	採取した漆の計量を行い、裏目と裏目と梱包し出荷する。
	止め掻き(～下旬)	裏目掻きと裏目掻きの間に木を一周する傷をつけて採取する。
	伐採搬出	残りの原木を伐採し搬出する。
	原木買付	翌年分の原木を買い付ける。
	蛾の卵の除去	原木に付着した卵を棒などで落とす。
12	伐採搬出	残りの原木を伐採し搬出する。
1	休	
2	休	生育の悪い木があれば、適宜根元の周りに肥料を撒く。
3	休	
4	休	

注：原木とは、掻く予定のウルシノキを指す(前年に買い付けたものも含む)。

#### 3.4.1 下刈り

下刈りは、後の作業を円滑にするだけでなく、芽や若木の生育を助けるためにも重要である。年に少なく

とも3回は行い、1回目はその年に掻く予定のない場所も含めウルシノキがあるところをほぼすべて行う。2回目以降は漆を掻けない雨天時に行い、晴天や曇りの時は可能な限り漆掻きに専念する。2回目以降は各土地所有者に任せることが多いが、1回目は秋田氏が行う。これは見つかりにくく切られやすい漆の芽を残すように、注意深く下刈りするためである。また雨天時には気温は低く、木に葉が茂っており木の下は降雨に強くさらされにくいいため、身体への負担が小さい。

下刈りは漆生産において重要な仕事であるが、秋田氏の漆生産のために育てているウルシノキは50ヶ所以上あり、これらすべてを回り下刈りすることは困難である。このため普段はそれぞれの管理を各所有者に任せているが、所有者によっては継続的な下刈りが困難であることが分かった。このようなところは徐々に荒地化する(図－5)。現在は秋田氏一人で掻く分のウルシノキは資源量としては十分にあり、一度荒れた漆林を元に戻すには大変な労力が必要であるため、荒れた漆林を元に戻すことはあまり行えない。そこで秋田氏は漆林の被覆植物としてゼンマイやフキを育て、下刈りの省力化を図っている(図－6)。一方山林の管理(下刈り等)に対する補助金の交付はあるが、ウルシノキが植栽されているところは本来畑として利用されたと多く、申請できない状況である。



図－5 荒れた漆林

注：2009/12/16 撮影



図－6 ゼンマイが被覆する漆林

注：2010/06/05 撮影

#### 3.4.2 ルート決定

各漆林を回りながらその年に掻き取る原木本数を決め、場所や地形などに考慮しながら4等分して4日間ですべて回れるようにする。これを漆掻き職人は「四



日山」と呼ぶ。林が西向きなら午前中に、東向きであれば午後に行うというように、気温が高くなる夏季中は太陽光を避けるように掻く場所を回るルート計画をする。四日山は、傷がつけられた原木に回復期間を与え、より多くの漆が採取できるようにするための工夫である。

### 3.4.3 漆の掻き方

秋田氏への聞き取り調査と合わせ、四柳（2006）を参考に漆の掻き方を以下にまとめた。はじめに、掻き始めの目印となる目立て（めたて）をする。まず、漆を掻く際に障害になる部分のみを枝打ちし（枝打ちはルートを決める際に随時行うこともある）、皮剥き鎌で表皮を削って滑らかにする。次に、原木の幹に表土から30～32cmの高さに掻き鎌で長さ1～15cmで深さおよそ3mmの水平溝をつける。さらにこれより18～20cmほど上の反対側に、同様の水平溝をつける。このように順次上方に1回目の傷となる目立てをつけていく。樹周30～55cmの木で10～11の目立てを二方面から行うが、これを二腹掻きという。目立ては漆の採取そのものが目的ではなく、2回目以降の辺掻きの基準点を決めると同時に、原木に刺激を与えて漆の分泌を盛んにするために行う。以前は6月に行われていたが、現在は暖冬の影響のため時期を早めている。原木の立つ場所が傾斜地であれば地面の高い側と低い側の二腹となるようにする。こうすることで、地面の高い側はより高い位置まで掻ける。

目立て後5日目に、漆を採取するための辺掻き（へんがき）を行う。辺掻きの方法は、まず、皮剥き鎌でその日に傷をつける部分の表皮を削り取り（図-7）、傷をつける（図-8.1,2）。このように4日に1度ずつ各目立てに1本ずつの辺掻きを行う。最下部の目立てと左右両側1番下の目立てだけは、目立ての上下に1本ずつの傷をつける。以後この目立てだけは上下に1本ずつ2本の辺掻きを行う。最初の辺掻きから1辺、2辺、3辺…と呼ぶ。辺のつけ方は8～18辺までは同じ長さに、それ以後はやや長くする。6月上旬から9月下旬頃には、最大25辺ほどになる。傷つけられたことによって、漆が溢れ出してくるので、すばやく掻き篋ですくい取り、タカツポ（3.4.4 後述）に入れる（図-9）。分泌時間は原木によって異なるがほぼ10～20分であり、この漆は辺掻漆または辺漆という。

掻くときの注意点は主に3点ある。まず適当な採取



図-7 皮剥き鎌を使用する様子

注：2010/06/05 日撮影



図-8.1 掻き鎌で傷をつける様子

注：2010/06/05 日撮影



図-8.2 掻き鎌で傷をつける秋田氏

注：2010/06/05 日撮影



図-9 掻き篋で漆をすくってタカツポに入れる様子

注：2010/06/05 日撮影

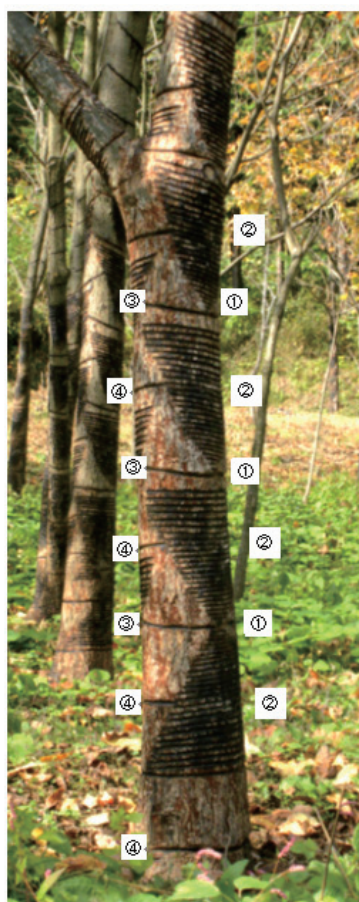
時期を見極めることである。1日のうちで漆の適当な採取時期は、分泌量が最も多い早朝である。これは夜間に蓄えられた漆が早朝の気温と樹体内の温度差による圧力差で、分泌が早く量も多くなるためである。また日中傷つけすぎると樹勢を弱め、期間内の総採取量が減少する。2点目は天候である。雨天時は傷口から細菌が入りやすく病気にかかり易くなり、漆が出なくなる。快晴よりも曇りで湿度が高く、蒸し暑い日が多いと漆が出る。3点目は掻く強さと長さである。採取傷は浅すぎると分泌速度が遅く、量も少ない。深すぎるとこの逆となるが木へのダメージが大きく、全体の生産量は少なくなり、漆に地中成分が混入して品質が悪くなる。掻く時期は早いほど、また木は若いほど皮が柔らかい。皮の堅さに応じて掻く強さを変える必要がある。掻く長さは徐々に長くしていくことで木への負担を小さくし、適度な刺激となってより多く漆が



取れる。

辺掻きを終えると、裏目掻き（うらめがき）をする。裏目掻きは、辺掻きの最終辺の上部と目立ての下に、辺に並行に傷をつけるというもので、幹の辺掻きをしなかった部分や、太めの枝からも漆を採取する。採取道具は掻き鎌に代わってエグリを用いる。エグリはカンナともいう。硬く粗い部分をエグリで削り、掻き鎌で辺掻きより深めに水平溝をつける。枝の裏目掻きは15～18cm毎に傷をつける。裏目掻きが辺掻きと異なる点は一本の木に対して5日ごとに傷をつけるのではなく、1日のうちにすべて採取することである。裏目漆の品質は辺掻きより劣り、灰褐色で粘着力がある。秋田氏は高さ30cmほどの台に乗って届く範囲まで掻く。これは注文があれば採ることとしている。

最後に、止め掻き（とめがき）をする。止め掻きは、裏目掻きに約6cm間隔で平行に樹幹を一周する2本の傷をつける。裏目掻きよりも深く傷をつけ、充分漆を分泌させてから採取する。1本の原木に対する止め掻きは、同日中に終わらせる。止め掻きによって漆の流れが完全に切断される。この止め掻きの品質は裏目掻きより劣る。止め掻きは、名のとおり樹液の流れを完全に遮断する。一連の採取方法を「殺し掻き」というのは、この作業からついた名前である。図－10は採取傷の位置を示している。



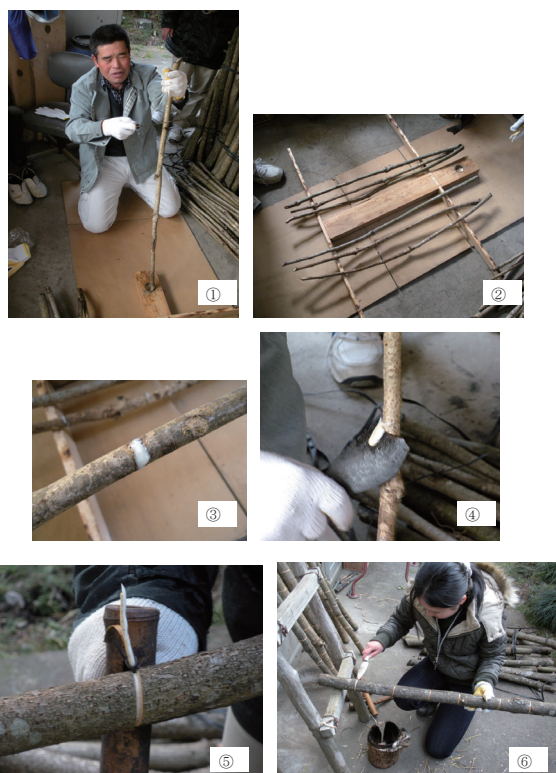
目立て	辺掻き	裏目掻き	止め掻き
①	②	③	④

図－10 採取傷の位置

注：2009/10/23撮影

止め掻きを終えた木は伐採されるが、この伐採木の枝からも漆を掻くことができる。これを枝掻きという（図－11）。枝掻きは手間がかかる上に少量しか漆を採取できないため、近年採算が合わないことから行われていない。枝掻きに使う枝は、12月～翌1月頃、切り揃えて乾燥を防ぐために川の淀みに浸けておき水分を含ませ、掻く前日に取り上げる。細い枝から漆を掻く方法は、まず、枝の先端を下にして立たせ、枝を回しながら皮剥き鎌で傷をつける。傷の間隔は約10cmであり、傷をつけたら寝かせて並べておく。数分後、枝から滲み出てくる漆をセシメ簞で採り、タカツッポに入れる。太い枝から漆を掻く方法は、まず、枝を横にし、掻き始めと掻き終わりが数cmずれるように枝掻き鎌で一回り傷をつける。これを約12cmの間隔で数ヶ所行う。傷をつけたら壁などに傷をつけた枝を立たせ、数分ほど経つと漆が滲み出てくるので、傷にそって掻き簞を動かして漆をすくい取り、タカツッポに入れる。

以上のように傷の付け方は多様であり、木へのダメージを抑えながら漆をより多く採る技術が培われてきた。



図－11 枝掻きの様子

注：①傷をつける、②傷のついた枝を並べておく、③漆が滲み出てくる、④漆を採る、⑤枝掻き鎌で傷をつける、⑥掻き簞で漆を採る、各様子を表す。2009/12/27撮影

### 3.4.4 使用道具

使用道具は、金物部分以外はすべて秋田氏が製作している（図－12）。金物の製作者は現在国内で一人しかおらず、秋田氏もこの製作者に金物を注文している。金物部分以外の主な材料はスギやホオノキで、家のそばの山林から調達する。漆を掻いた後は、いずれの道具も毎回欠かさず手入れする。手入れをしなければ付着した漆が固まり使い物にならなくなるためである。

しかし毎日手入れをしても掻き鎌はおよそ1年で役目を終える。

ここでタカツポについて説明する。タカツポは、ダカツポ、漆壺、カキタルともいう。タカツポはホオノキの皮で作る。大きさは様々だが、そのうちの一つは直径15cm、高さ17cmであった。ホオノキの皮を使うのは、タカツポの縁部分が刷毛のような役割をし、道具に付着した漆をぬぐいとり易くするためである。皮は夏の土用の頃に剥かないと虫がついてしまう。作り方はツッパシという円柱形の本型に、水で柔らかくした皮を巻く。ツッパシは上部の直径が下部の直径より5～10mmほど大きくなっている。これは皮を型から抜きやすくするためである。皮が重なる部分はボンドで留め、底部分は釘で留める。以前は釘ではなく竹を使っていた。上から5cmほど下部に、数cm幅の皮を巻き、その上下に麻の紐をくくりつける。これによって紐がとれにくくなる。接合部分の材料は異なるが、先代からこの作り方は変わっていない。

毎日漆掻きを終えると、タカツポから出荷用の漆樽へその日採取した漆を移す。その後その日に採った漆を計量し、ゴングリの刃をタカツポの内面にやや直角に沿わせ回しながら付着した漆を集めて出荷用の漆樽に入れる。

タカツポの手入れ方法は、図-13のように、フジの木を叩いて先を柔らかくした棒で、乾きの良い植物油を少量使ってタカツポについた漆を落とす。これをつつまわしするという。こうしておけば漆が固まりにくい。また使った道具は、水をかけながら研ぎ石

で磨く。この際掻き鎌やエグリは、刃の内側も磨けるような厚さの薄い研ぎ石を使う。これらの手入れを終えて、漆掻きの1日が終わる。



図-13 つつまわしの様子

注：2009/09/15 撮影

### 3.4.5 渋紙作り

渋紙は、漆漏れを防ぐために漆樽の表面にかぶせる和紙のことである。渋柿の汁（柿渋）を塗った和紙が2枚貼り合わせてあり、防水性や防腐性を持つため漆の保存や出荷に欠かせない材のひとつである。柿渋はタンニンを多量に含み、発酵の過程で生成された揮発性有機酸を含むため特有の渋臭を有する褐色の液体である。柿渋の防水・防腐効果は、柿渋中のタンニンが酸化重合し不溶性の強靱な皮膜を生じることによるものであるとされている（今井、2003）。作成時期は9月下旬ころだが、一度に数十枚作ることができるため毎年作る必要はない。柿をもぎる時期は8月上旬の夏の土用の頃は渋が多く適当とされる。材料は、和紙（1組分50×50cm2枚）、青い渋柿（数十個）、水（柿数に合わせて適量）である。道具類は、新聞紙（4、5枚）、ビニールシート（約100×100cm1枚）、まな板、包丁、ボウル、ミキサー、手ぬぐい、刷毛各1を用いる。

作り方は、まず渋柿のヘタを取り除き、約2cm角



図-12 漆掻きに使用する道具

注：2009/09/15 撮影

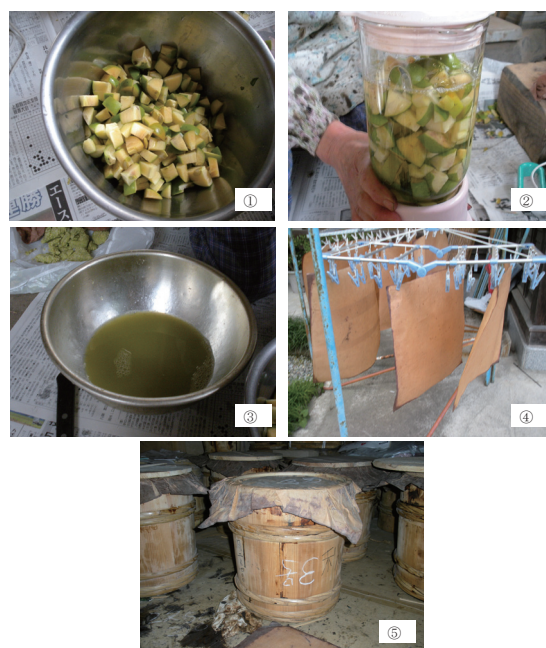


図-14 渋紙を作る様子

注：①細かく切った渋柿、②渋柿をミキサーにかける、③柿汁、④渋紙を乾かす、⑤渋紙を使用する様子。2009/09/15 撮影



に切る（種を除く必要はない）。次にミキサーに水と切った柿を入れ、細かくする（水は最初ミキサーにかけるときに柿が浸る程度入れ、2度目以降は柿渋を水の代わりに使う）。これを手ぬぐいで濾し（柿渋が衣類に付くと黒くなるので注意する）、搾った柿汁（柿渋）を刷毛で和紙に塗る（和紙を約50×50cmに切っておき、新聞紙の上にビニールシートを敷いておく。半端な大きさの和紙があれば貼り合わせて使う）。この上にもう1枚和紙を重ね、貼り合わせる（2枚の和紙の間に気泡が入らないようにし、和紙の繊維の方向が垂直方向になるように重ねる）。さらに裏表に柿渋を塗り、乾かす。塗って乾かす作業を数回繰り返し、和紙がこげ茶色になれば渋紙として使用する（残った柿汁は容器に入れて保存し、早めに使用する）。この過程を図-14に示した。

### 3.4.6 出荷作業

予め注文を受けていた量の漆が取り終わると出荷する。出荷は、受け取りに来る買い取り業者に直接渡す場合と秋田氏から送付する場合とがある。前者の場合、買い取り業者はその場で漆の状態を確認できる。後者の場合、秋田氏が運送代を支払う。出荷作業は、漆が一杯に入った漆樽を計量し、これを梱包することをいう。梱包には稲藁や藁紐、渋紙が必要である。梱包の手順は、まず稲藁の輪を作り（稲藁の輪は樽の上下に置かれ、クッションの役割をもつため本稿では稲藁クッションと記す）、漆樽に渋紙をかぶせ、竹輪（竹でできた輪っか）で渋紙を押さえるようにはめ、漆樽の上部を藁紐で5重に巻く。渋紙を押さえるものは、竹輪とかがみ（円状のスギ板）の2種類ある。竹輪を用いるとかがみをを用いるよりも僅かに多く漆を入れられる。次に、藁紐、稲藁クッション、円状のスギ板、漆樽、円状のスギ板、稲藁クッションの順に重ね、藁紐で垂直方向に3重に巻き、これを3回一定の間隔を開



図-15 漆樽を梱包する様子

注：①稲藁クッション、②稲藁クッションを作る、③樽の口に竹輪をはめる、④藁紐で樽の上部を五重に縛る、⑤藁紐の上に杉板を重ねる、⑥樽を縛り始める、⑦藁紐で樽を全体的に縛る（垂直方向）、⑧樽を上から見た図、⑨藁紐で樽を全体的に縛る（水平方向）、⑩完成図。2009/10/23撮影

けて縛る（上からは巻いた紐が六角形に見える）。さらに、最初5重に巻いた部分の上に、垂直方向に巻いた部分を3本まとめて巻き込みながら水平方向に一回り縛る。最後に、樽の中間あたりを前記と同様に一回り縛った後、二回り縛る。この過程を図-15に示した。



図-16 伐採木をまとめた様子

注：2009/12/27撮影



図-17 漆林の季節変化

注：①2009/08/27、②同年10/23、③同年12/16撮影。②③はほぼ同じ方向から、①はその反対方向から撮影。



このようにして梱包された荒味漆は、問屋へ出荷され、伊勢神宮、久能山東照宮、見延山久遠寺、鶴岡八幡宮等の重要文化財の修復にも使用される。

#### 3.4.7 伐採搬出

漆を掻き採った原木は伐採される。伐採木はその場に数ヶ所に分けてまとめられる。土地所有者の要望によって、伐採木を搬出するかそのまま放置するかが決まる。現在ではほぼ秋田氏が搬出して持ち帰り、主に薪として使っている。伐採することによって次世代木が萌芽更新によって育ち、搬出せずに林内に置かれた伐採木は徐々に分解され土に還り、次世代の木の栄養分となる。そのため、漆掻き職人にとって伐採も欠かせない重要な仕事である。伐採木を搬出するのは、作業環境をよくするためである。翌年下刈りをする際、残った伐採木が障害になることがあり、また漆掻きの際には足場を整えて安全を確保する必要があるため搬出することが望ましい。しかし搬出においてもかなりの労働力が必要である。毎年700本以上の原木を扱う秋田氏にとってこれは極めて重労働であることは間違いない。伐採作業の手順は、まず根元から伐採し、枝を切り落とす。次に幹と枝を約2m間隔に切断し、幹と枝を約2×1mのまとまりにしておく(図-16)。

図-17では、時期の異なる同じ場所の漆林の季節変化の様子を示した。伐採搬出によって見通しがよくなっている。

#### 3.4.8 原木買付

秋田氏がウルシノキを持つ家々を訪れ、直接交渉で次年分のウルシノキ(原木)を買い付ける。原木1本当たりの値段で計算して原木所有者に支払うが、原木1本当たりの価格は様々な条件によって異なる。例えば下刈りを土地所有者が行う場合と秋田氏が行う場合とでは、前者は高くなる。また原木の状態がよく、1ヶ所に数十本のまとまった本数があり、比較的平らな地形であれば、効率よく漆掻きができるためより高い価格で買う。秋田氏は、原木を買い過ぎることがないように調整している。例えば、ある漆林内で掻き取れると思われるウルシノキが20本あればこのうち全20本ではなく15本を買い、最終的に18本を掻き取ったならば3本分の原木代を後払いする。このように、はじめに掻き取れる木すべて買うのではなく、木の状態や天候などによって掻き取ることのできる本数が変動することを見込み、少なめに買うのである。それでもはじめの原木買付本数分を掻き取ることができず、その年に余ることもある。このような場合には、土地利用相当額を土地所有者に支払い、翌年以降分の原木とする。

#### 3.4.9 蛾の卵の除去

蛾の卵が孵化したままにしておくとウルシノキの葉が食害される。これを抑えるために、秋田氏は木の幹に黒い塊となって付着した蛾の卵(図-18)を見つける度に棒などで下に落としている。細かな対処によって翌年の虫害を予防できるため、殺虫剤はほとんど使用していない。



図-18 蛾の卵が付着する様子

注：2010/03/28 撮影

#### 3.4.10 ウルシノキの増やし方

ウルシノキの増やし方は、主に萌芽更新である。現在は、漆林の多くを萌芽更新で育成している。若芽が出たばかりの時期は、これを切らないよう特に丁寧な下刈りが必要となり、毎年の継続的な下刈りや蔓切りによって萌芽更新を可能にしている。

一方ウルシノキの植栽方法には、実生苗の植栽と根分けがある。1980年代以前は自家栽培だけでは苗が足りず、岩手県や新潟県から苗を取り寄せていたが、現在苗は栽培しておらず、林内で穴が開いたように空間ができた場合に育ちの良いウルシノキから根分け(分根)をしている。栽培の仕方は、まず漆の出がよい木の実を冬にとり(図-19)、種を臼でついてロウをとる(化学処理でできる)。次にその種を水に冷やし、春に播く。これは1年生で約20～30cmに育つ(2、3年目で芽が出る)。この後、間引きをして根を15～20cmに切り、上部を約3cm出して10本まとめて植えておく。これから5、6本の赤い芽が出たら植栽する(芽は春と夏の土用の頃の2回出る)。



図-19 漆の実

注：左 2009/10/23、右 2009/12/27 撮影

#### 3.4.11 技術継承への取り組み

秋田氏は現在後継者の育成を行っていないが、初心者でも漆を掻きやすいよう漆林の環境改善を図っている。この環境改善とは、急な傾斜地よりも漆の掻きやすい平坦な土地で漆林を育てることである。現状は仕事量が多く人手不足なため、研修生に指導する時間を割くことは困難であるが、下刈り作業を委託できるような支援があれば、研修生を受け入れることに意欲的である。

那珂川町と栃木県としては、両者とも現段階では漆の生産に対して行政的な取組は行っていないことが明らかとなった。



### 3.5 ウルシノキの分布と存在形態

### 3.5.1 調査方法

秋田氏がどのような地理的圏内において、またどのような環境下で漆生産を行っているかを明らかにするため、ウルシノキの分布と存在形態について調査した。使用した道具類は、GPS 受信機 (THALES NAVIGATION 社製の MobileMapper)、調査票、デジタルカメラ、2万5千分の1地形図、解析ソフト (MobileMapper Office、カシミール3D)、数値地図25000 (白河) である。方法は、まず秋田氏にウルシノキのある場所 (その年に掻いた場所や掻く予定の場所を含む) を案内してもらい、おおよその位置を地形図により確認し、GPS を用いたポイント計測を行った。また各地点で写真撮影をし、地名、GPS 番号、写真番号、土地所有形態、下刈り等の管理者などを記録した。次に、取得 GPS データの補正をし、カシミール3D に国土地理院の数値地図25000 (白河) を読み、補正後の GPS データを地図と合わせ位置情報を得た。

### 3.5.2 調査結果

調査は、1日目は2009(平成21)年12月11日(金)8:00～16:00(栃木県・茨城県内)、2日目は同年月16日(水)8:00～16:30(栃木県・茨城県内)に行った。この結果、計55ヶ所のデータを得、ウルシノキは栃木県の茂木町、那珂川町、那須烏山市、大田原市、茨城県の常陸大宮市、太子町に分布していることが明らかとなった(図-20)。表-6に55ヶ所の漆林の属性を示した。また、それぞれの漆林の例として図をいくつか載せた(図21-24)。秋田氏は、万が一自宅で何か問題が生じた場合、比較的すぐに自宅へ戻ることのできる範囲内で漆生産を行っている。また孤立して存在するウルシノキはあまり見られず、異なる生長年数のものが数十から数百本まとまって生育したため、このエリアを漆林とした。



図-20 漆林の分布域

資料：株式会社 Mapion Web サイト「地図ガキ」URL (<http://www.mapion.co.jp/>)、2010/09/30 参照  
注：赤い丸点は漆林を示す

土地所有形態については、55ヶ所のうち54ヶ所が個人所有（秋田氏個人の所有地はこのうち5ヶ所）、残り1ヶ所は会社所有であった。

駐車場所から漆林まで徒歩でかかる時間は、漆林の近くまで軽トラックで行くことがほぼ可能なため、数分以内で各漆林に到着できることができ、そのため急

な山道を長時間歩くような、困難かと思われる移動はないに等しいことが明らかとなった。

漆林の地形については、林内で作業する際の足元の安定性が高いといえる平坦地が多く、田畑の縁や道路脇等の傾斜地にある漆林は、平坦地に比べ足元が安定せず危険であると思われるが、予想に反して少なかった。写真から判断した結果、平坦地は38ヶ所、平坦地と傾斜地両方を含む林は5ヶ所、傾斜地は12ヶ所であった。

下刈り等の管理者については、55ヶ所中およそ7割が各土地所有者、3割弱が秋田氏であった。また下刈り作業が追い付かない際は、人を雇って下刈りを委託することや知人がボランティアとして行う場合もあり、今回の調査では1ヶ所該当した。

漆林となる前の土地利用については、畑、田、原野、土手（田畑の縁や道路脇等）、不明の5つに区分でき、8割は畑であった。畑と田は、苗の植栽によって漆林に仕立て、土手と原野は元来ウルシノキが存在しており、これらを萌芽更新させ育成している。また植栽した木よりも自然の土手などで生えている木の方が漆はよく出る。この理由は不明であるが、おそらく自然淘汰されて生き残った木は、自己防御力も強いためではないかと考えられる。また地形による含水率の大きさや水の循環速度も影響していると考えられる。

漆林までの移動は容易であり、平坦地が多いことか

表-6 漆林の属性

漆林 No.	地名(〒栃木県, i茨城県)	土地所有形態	地形	下刈り等管 理者	漆林以前の 土地利用	面積 (ha)	図番号
1	t 茂木町黒田	個人	s	o	畑	-	-
2	t 茂木町黒田	会社	s	A氏	畑	-	-
3	t 茂木町黒田	個人	f	o	畑	-	21
4	t 茂木町黒田	個人	f	o	畑	-	-
5	t 那須烏山市大沢	個人	f	o	原野	-	-
6	t 那須川町富士鷺子沢	個人	f	o	田	-	-
7	i 常陸大宮市鷺子	個人	f	o	畑	-	-
8	i 常陸大宮市米之沢	個人	s	o	原野	-	-
9	i 常陸大宮市米之沢	個人	f	o	畑	-	-
10	i 常陸大宮市高部	個人	f	o	不明	-	-
11	i 大子町山田	個人	f	o	畑	-	-
12	i 大子町山田	個人	s	A氏	畑	-	-
13	i 大子町端	個人	f	A氏	畑	-	-
14	i 大子町端	個人	f	A氏	畑	-	-
15	i 大子町端	個人	f	A氏	畑	-	-
16	i 大子町端	個人	s	A氏	畑	-	-
17	i 大子町芦野倉	個人	f	o	畑	-	-
18	i 大子町田野沢	個人	f	o	畑	-	-
19	i 大子町田野沢	個人	f	o	畑	-	-
20	i 大子町下金沢	個人	s	o	畑	-	-
21	i 大子町上金沢	個人	s	o	土手	-	-
22	i 常陸大宮市久陸	個人	s	o	畑	-	-
23	i 常陸大宮市高部	個人	fs	o	畑	-	-
24	i 常陸大宮市高部	個人	f	o	畑	-	-
25	t 那須川町大那地	個人	f	o	畑	-	-
26	t 那須川町大内	個人	s	A氏	畑	-	-
27	t 那須川町大内	個人	fs	o	畑	-	-
28	t 那須川町大内	個人	f	o	畑	-	-
29	t 那須川町谷川	個人	fs	o	土手	-	-
30	t 那須川町谷川	個人	s	A氏	畑	-	-
31	t 那須川町谷川	個人	s	o	原野	-	-
32	t 那須川町谷川	個人	f	o	畑	-	-
33	t 那須川町谷川	個人	fs	o	畑	-	-
34	i 大子町上金沢	個人	f	o	畑	-	-
35	i 大子町上金沢	個人	s	o	土手	-	22
36	i 大子町相川	個人	f	o	畑	-	-
37	i 大子町相川	個人	f	o	畑	-	-
38	i 大子町相川	個人	f	o	田	-	-
39	i 大子町相川	個人	s	o	畑	-	-
40	t 大田原市須賀川	個人	f	o	畑	-	-
41	t 那須川町大山田上郷	個人	f	o	畑	-	-
42	t 那須川町大山田上郷	個人	s	o	畑	-	-
43	t 那須川町大山田上郷	個人	f	o	畑	-	23
44	t 那須川町大山田上郷	個人	f	o	畑	-	-
45	t 那須川町大山田上郷	個人	s	A氏	畑	-	-
46	t 那須川町大山田上郷	個人	f	o	畑	-	-
47	t 那須川町大山田上郷	個人	f	o	畑	-	-
48	t 那須川町大山田下郷	個人	f	o	畑	-	-
49	t 那須川町大山田下郷	個人	s	o	畑	-	-
50	t 那須川町健武	個人 (A氏)	f	o(A氏)	畑	0.02	24
51	t 那須川町健武	個人 (A氏)	f	o(A氏)	畑	-	-
52	t 那須川町健武	個人 (A氏)	f	o(A氏)	畑	0.18	-
53	t 那須川町健武	個人	fs	o	畑	-	17
54	t 那須川町健武	個人 (A氏)	f	o(A氏)	畑	0.13	-
55	t 那須川町健武	個人 (A氏)	f	o(A氏)	畑	0.30	-

注：地形 f（平坦地）・s（傾斜地）・fs（平坦地と傾斜地の両方を含む）、下刈り等管理者 o（各土地所有者）



ら安全性の高い仕事環境であるといえる。このように平坦地が多い理由は、前は畑であったという漆林の多さを反映していると考えられる。また、漆林はほぼ秋田氏以外の個人が所有しており、基本的には下刈り等の管理を各土地所有者に任せていることから、漆生産は周辺住民との協力関係が非常に重要であるといえる。しかし各土地所有者は高齢者が多いと見受けられたことから、今後下刈り等の作業を秋田氏が行う割合が確実に増えると予測される。現在漆林の荒地化は確実に進行中であり、下刈り等の作業への人手不足の問題は深刻である。さらに、ウルシノキは自然的要因より人為的要因に強く影響しながら生育場所を変えて継承されてきたため、農山村地域の過疎高齢化とともに漆林は急減すると考えられる。



図-21 道路脇にある漆林

注：2009/12/11 撮影



図-22 傾斜地に育つウルシノキ

注：2009/12/11 撮影



図-23 以前は畑であった漆林

注：2009/12/16 撮影



図-24 秋田氏所有の漆林の一例

注：2009/12/16 撮影

#### 4 まとめと考察

本研究では、まず、国内の漆生産に関する歴史的展開について文献をもとに整理し、漆生産を取り巻く伝統技術のおかれた現状について明らかとした。また、栃木県唯一の漆掻き職人秋田氏をめぐる生産技術と漆林の管理等について明らかとした。漆生産は、天候条件に強く依存し、古くからの生産技術を今なお続けていること、漆林の管理を通して多くの地域住民も関わっていること、その管理は耕作放棄地の有効利用を兼ねていることが明らかとなった。

まず、現在における漆生産及び技術の継承についての積極的意義を挙げるとすれば、次のような点が考えられる。

第一に、秋田氏の生産形態から明らかになったように、漆生産が極めて持続的循環型の生産様式を持つという特長がある。漆は堅牢な塗膜であるが、一方で紫外線に弱いという性質をもつ。これは漆工芸においては弱点であるが、塗膜が壊れると自然に還るところは利点であるとも言われている。さらに漆の生産現場においても、使用されている様々な道具や材料はほぼ循環型資源である。このため明らかに化学塗料と比べ、漆生産は環境負荷が小さい。近年、伐採木を利用して、漆器を製作する試みが研究レベルで行われている（注3）。この試みは、粉状の植物繊維（スギ間伐材木粉）と漆を最適な条件下で加熱・混合することで成形材料を得られたという結果から、植物繊維をウルシノキに置き換えるというものである。成形材料は、図25に示すように、加熱圧縮後、表面に漆が塗られて成形物となる。この試みが成功すれば、漆の生産に大きな効果を与えると考えられる。これまで放置あるいは薪となっていた伐採木で収入を得ることが期待できるためである。



図-25 ウルシノキのおが屑と漆・スギ間伐材木粉を混合した成形物

注：括弧内の数字は漆林数を表す。2009/12/27 撮影



第二に、漆生産は農山村における適切な土地利用を通して、地域振興につながる可能性があることが示唆される。漆生産は漆掻き職人だけでなく、地域住民も関わっていることが明らかとなった。漆林が分布しているのは、道路や農耕地、森林の縁など、集落の中でも比較的条件的に良い場所であり、これらの土地が放棄されるのをくい留める役割を果たしている。また、耕作放棄地に漆林が作られるようになった今、数少ない漆産地の一つとしての自治体レベルでの意識が向上すれば、土地の有効利用と地域振興の両面で期待できる。特に本調査で漆林の分布が確認された那珂川町においては、清流の那珂川で育まれてきた伝統ある漁労と並び、漆生産・漆掻きが誇るべき伝統技術として位置づけられるといえる。

第三に、上記とも関わるが、漆生産による獣害抑制効果が期待できる。里山の中でも特に人家の近くに多く分布する漆林を継続的に管理することにより、畑等への獣害を抑制できることが期待できる。一般的に、耕作放棄地が荒地であるとイノシシ等の隠れ家には絶好の場所となるといわれているため、耕作放棄地を活用して育てられている漆林の管理を継続していくことは重要な課題である。

次に、漆生産が直面している課題を整理すると、次のような点が挙げられる。

第一に、資源としてのウルシノキの減少が予想される。農山村地域の過疎化と高齢化に伴い、下刈り等の管理を放棄せざるを得なくなり、荒地化する漆林が増える可能性が十分にある。次世代へウルシノキを残していくためには、漆掻き職人と多くの住民との協力が不可欠である。例えば、現在少ない下刈ボランティアを募集する広報活動が挙げられる。

第二に、漆の急激な需要増に早急に対応できないことである。漆を掻く樹齢まで木を育てるには、約10年間の継続的な管理が必要なためであり、漆掻き職人はウルシノキを何年も見越して育てている。仮に災害等の突発的事態が生じた際に、需要に見合うだけの生産量が確保できないことが予想される。

第三に、漆生産を担う人材を考える場合、その労働体系が確保を阻む要因となっているという点である。漆生産は、天候に大きく影響され、時期が限定的である。漆を掻ける時期は5～11月頃であり、その間雨が降れば漆は掻けない。また、働ける時期が限られているため、漆掻きシーズン以外の冬期間他に仕事を見つける必要がある。秋田氏の場合、現在冬期間は働いていないが以前は林業を行っていた。岩手県二戸市浄法寺地区の漆掻き職人の多くは、農業や林業、塗りとの兼業をしている。

第四に、二点目とも関わるが、漆生産および関連産業全体の課題として、国産漆の供給量を向上させること、およびその前提となる社寺等の修復に際しての国産漆への需要増、外国産漆からの転換がいかに進められるか、さらに、原料供給地と需要者とがいかに連携して互いに競合することなく業態を維持できるか、という点を指摘できる。漆が大量に必要な社寺修復の際、国内の漆産地が連携して国産漆の供給に取り組

むことが可能性として挙げられるが、財団法人日光社寺文化財保存会（注4）の例でみると、2007（平成19）年から社寺修復に使用する漆100%国産漆に切り替えたと同時に発注先を一産地に限定した。これは、当該産地がより意欲的に漆生産に取り組むきっかけとなったという点でひとつの成果であるが、逆に各地に散在する原料供給者である漆掻き職人にとっては、大きな痛手である。実際に、日光の社寺修復に使われていた秋田氏の漆は、2007年以降使われなくなっている。日光社寺文化財保存会が、漆を一産地に限定したことには様々な理由がある。当該産地は行政が中心となって漆生産の活性化に尽力しており（注5）安定した供給量が期待できること、修復に使用する漆を一産地に限定することで管理しやすく、外国産漆の混入を防ぐこと等が挙げられている（注6）。このような取組が、産地間連携のかたちをとって進められることが、漆生産および関連産業全体の最も大きな課題である。

国内で漆の生産が最も盛んな岩手県二戸市浄法寺地区では、「浄法寺塗」の名称でブランド化を進め、ウルシノキの植栽・保育、および漆掻き（生漆生産）、そして漆器製造という一連の工程が、自治体の強力な支援を受けて維持されている。しかし、多くの漆器産地において、原料の漆は外国産に頼っているのが実情である。また、今回の調査対象となった秋田氏のように、原料供給者として点的に活動する生産者は全国に散在している一方で、「◎◎塗」を復活させて新たな産地を形成しようとする取組みも見られる。つまり、漆掻き工程と塗り工程を一産地内で有している浄法寺地区は産地として一定の成熟を遂げていると考えられる。このような現代における全国の漆生産および関連産業について、その産地の歴史的な変遷、原料供給地と立地の変化、伝統技術の伝播、現時点での存在形態と流通構造などについて体系的に網羅していくことが、今後に関わる研究の課題である。

## 謝辞

本研究において多大なご協力を頂戴しました、漆掻き職人の秋田稔氏、奥様の廣子氏に深くお礼申し上げます。那珂川町役場の皆様、馬頭郷土資料館の皆様、岩手県二戸市うるし振興室と滴生舎の皆様、地方独立行政法人東京都立産業技術研究センターの方々、漆林の土地所有者の皆様、財団法人日光社寺文化財保存会の方へ、この場をお借りして感謝の意を表します。

## 注

- 1) 林野庁 Web サイト「特用林産基礎資料」  
URL (<http://www.rinya.maff.go.jp/j/kouhou/toukei/index.html>)、  
2010/01/07 参照
- 2) NPO 法人共存の森ネットワーク Web サイト「森の“聞き書き甲子園” 聞き書き電子図書館」  
URL (<http://lib.ruralnet.or.jp/mori/index.html>)、  
2009/08/24 参照
- 3) 地方独立行政法人東京都立産業技術研究センターへの聞き取り調査、2009/12/27 実施

- 4) 日光社寺の指定建造物の保存修理や防災設備の整備、漆・彩色・金具工事等に関する調査研究等を行う。昭和45年11月24日財団法人設立申請、翌月24日許可。
- 5) 岩手県二戸市うるし振興室への聞き取り調査、2009/12/01 実施、  
岩手県二戸市、経済産業省東北経済産業局（2009）『平成20年度地方の元気再生事業「浄法寺漆」による地域再生プロジェクト～国産漆最大の産地が挑む元気再生～本編』  
URL（[http://www.tohoku.meti.go.jp/koho/report/pdf/090810\\_2.pdf](http://www.tohoku.meti.go.jp/koho/report/pdf/090810_2.pdf)）、2010/03/04 参照
- 6) 財団法人日光社寺文化財保存会への聞き取り調査、2010/09/29 実施
- 13-513 頁（1979）
- 2) 今井敬潤：ものと人間の文化史 115・柿渋（かきしぶ）、法政大学出版局、東京、240-242 頁（2003）
- 3) 小林信好：特産情報 31（1）（361）、日本特産振興会、プランツワールド、東京、23 頁（2009）
- 4) 武内亮：『世界最古の漆製品 測定で「9000 年前」と判明－北海道・南茅部町で昨年出土』、毎日新聞社、2001.6.15 朝刊
- 5) 野上哲：『中国最古級の漆器 浙江省 2000～1000 年さかのぼる 日中調査グループ』、毎日新聞社、2009.1.8 夕刊
- 6) 四柳嘉章：漆の文化史、岩波書店、東京、20-22,44 頁（2009）
- 7) 四柳嘉章：ものと人間の文化史 131- I・漆（うるし）I、法政大学出版局、東京、5-15 頁（2006）

#### 引用文献

- 1) 伊藤清三：日本の漆、東京文庫出版部、東京、